



2019年9月



みなさん、夏休みはいかがお過ごしでしたか。勉強、部活、帰省、旅行などさまざまだと思いますが、読書で過ごすのもいいものです。

さて、今回私がおすすめしたい本は『五月三十五日』エーリヒ・ケストナー作 高橋健二訳 岩波書店 1962です。タイトルからしてなんだか現実離れをしていますよね…。実際読んでみると、予想を裏切らない、現実離れをした場面が出てくるおはなしです。異国の国・夢のような国に旅をした気分を味わうことができます。

主人公のコンラート少年と叔父のリングルフートと、ネグロ・カバロというサーカス出身のしゃべることのできる馬が、南洋を目指すおはなしです。南洋を目指すことになったのは、コンラート少年は算数がうまいので、空想力をつけるために南洋について作文を書いてくるよう先生に言われたからなのでした。まず、南洋への行き方から奇想です。なんと、叔父の家にある古いタンスが二時間くらいで南洋にたどり着ける場所と繋がっているというのです。

タンスの中に入って、繋がっていた場所は……森でした。まず、なまけものの国を通ります。なまけものの国の人には125キロ以下の体重になると、この国を追い出されるのです。どの家にも、家の下には車輪がついていて馬もつけてあり、住人はベッドに寝たままでこへでも行くことができるのです。サクランボとリンゴとナシとスモモの四種類が一本の木になって、木のみきにあるハンドルを操作すると、皮がむいた果物や果物のお菓子が木からでてくるという不思議な国でした。フライパンをうしろに引きずっているニワトリは、ハムつきの卵の目玉焼きか、アスパラガスつきのオムレツをうみおとしてくれるのです。また、この国では、空想することが実際に起きます。そして、空想した本人が「引っこめ、さっさと！」と言うと元に戻ったり、消えたりします。なんともファンタジーなおはなしです。

二番目に通った場所は、偉大な過去の城です。カール大帝やジュリアス・シーザー、ナポレオン一世、アレキサンダー大王など、活躍した時代の違う人たちがここでは一緒に登場します。

三番目に通った場所は、さかさの世界です。いじわるな大人には心入れかえるための学校があり、先生はなんと子どもたちなのです。

四番目に通った場所は、電気の都市です。自動式の自動車、動く歩道、携帯電話、家畜加工場すべてが電気・機械によるものでした。

さて、南洋へもあともう少しです。赤道が二メートル幅の鉄鋼できており、赤道を磨いている女性に出会います。赤道をまっすぐ進むと、南洋西玄関に着きます。ここでは、様々な動物が登場しますよ！ゴリラが指揮をとり、サル、オウム、ゾウが音楽を奏でて迎えてくれます。そのあと、トラ三頭に出くわしましたが、叔父のリングルフートがステッキを小銃のように持つと、トラは白い布を出して逃げます。クジラに追われているという小さい女の子と出会い、クジラも登場します。ネグロ・カバロの馬はサトウキビ畑で小さい白馬に出会い、よく気が合うということで、この南洋に残ることになります。来る時はネグロ・カバロの馬に乗ってきましたが、コンラート少年と叔父のリングルフートは無事にお家に帰れるのでしょうか…？このあと奇跡が起こります

あとがきに書かれていましたが、このおはなしは1931年にできたそうです。今から約90年前にケストナーは、将来機械化が進み携帯電話などを予想していたことになります。電気の町で起こった出来事を読むと、電気・機械に頼りすぎるのはよくないという、ケストナーの忠告のように私は思えました。

